

国語科総合単元づくりのための 教材開発と指導法に関する基礎的研究 (V)

— 言葉をとおしてかかわり合い、他者とつながる言葉をつくり出す国語科の学習 —

山元 隆春 佐々木 勇 杉川 千草 加藤 秀雄
八澤 聡 實谷 富美

1. はじめに

私たちは、小中一貫教育における国語科の総合単元の開発を目標に、これまでカリキュラムや教材づくり、指導法の改善などに取り組んできた。

昨年度は、それぞれの発達段階における子どもたちが、授業の中で、言葉をとおしてどんな他者とどのようなかかわり合いをしているかを明らかにし、子どもたちが学習の中で、他者とつながる言葉をつくり出していけるような指導法や単元を開発するための手が見出すための実践・研究を行った。その結果、それぞれの学年において、他者の言葉と出会う単元構成や他者とつながる言葉の意識化を試みることができた。

そこで、学習者が他者とかわり合いながら他者とつながる言葉をつくり出していく学習をする授業モデルをいくつか仮定し、実践をとおしてその可能性と問題点を明らかにしていくことにした。そして、学習者が言葉をとおしてかかわり合う場面とはどのような場なのかを想定し、言葉を通じたかかわり合いやつながりのある学習場面の特徴の一端を明らかにする。

2. 研究の構想

(1) 研究の目的

本研究の目的は、小中の発達段階に照らしながら、他者を学習場面に効果的に設定し、他者とのかかわり合いの中から学習者が自分の言葉を豊かにしていく学習活動・単元を開発するための基礎的な知見を得ることにある。

子どもたちは、日々の国語科の授業において、さまざまな他者と出会っている。その中で、子どもたちは、一人一人が感じたことや考えたことなどを、お互いに交流して受けとめ合うことによって、自分の考えを広

げたり深めたりする。また、さまざまな他者との交流をとおして、自分の学習の深まりを確かめたり、他者とともに学習することのよさを実感したりしながら学習を進めている。このように、「言葉をとおしてかかわり合う」とは、授業の中でさまざまな他者の言葉に出会い、学習者どうしで交流して受けとめ合うことによって、一人一人の感じたことや考えたことを広げたり深めたりすることである。また、「他者とつながる言葉をつくり出す」とは、学びを教室の中だけに留めるのではなく、実際の生活や社会の中でも、自分の言葉が他者とのよりよい関係を築いていくことにつながるように、言葉を豊かにすることであると考えている。

(2) 研究の方法

①他者の設定

本研究では、各学年の学習において他者をそれぞれ次のように設定し、単元を構成した。

3年：詩の内面に存在する他者（本文の言葉、作者の思い）、自分の思いや表現をお互いに伝え合う友達

7年：直接インタビューをする相手、観察対象としてのインタビューの言葉、自分の気付きを交流し合う相手

いずれの場合も、授業の中に話し合い活動や表現活動を設定し、言葉によるかかわり合いや言葉をつくり出す学習過程が自然に行われるよう配慮し、他者の存在が学習者のつくり出す言葉にどのような影響を及ぼすかを明らかにしていくこととする。

②指導の工夫

想定した他者の違いが学習指導の中で顕著に表れるように、3年では、詩の内面に存在する他者との出会いを大切にするとともに、意見交流の場を積極的に設

Takaharu Yamamoto, Isamu Sasaki, Chigusa Sugikawa, Hideo Kato, Satoshi Yazawa, Fumi Jitsutani: A Fundamental Study on Teaching Materials and Methods for Developing Integrated Learning of Japanese Language (V) : Some considerations on two Japanese language units for thinking environments around us.

け、自分たちの表現を練り上げるようにする。7年では、インタビューを直接体験するだけでなく、友達のインタビューの言葉を観察させる。さらに、気付きを交流し合うことによって、一般化した他者を意識したインタビューのあり方について具体的に考えさせるようにする。

(3) 検証の方法

検証の材料として、子どもの学習記録や作品、授業記録などを取り上げ、考察を行う。

3. 実践1－3年「メディアを生かす」

詩のみりよくをつたえよう－

(1) 授業の構想

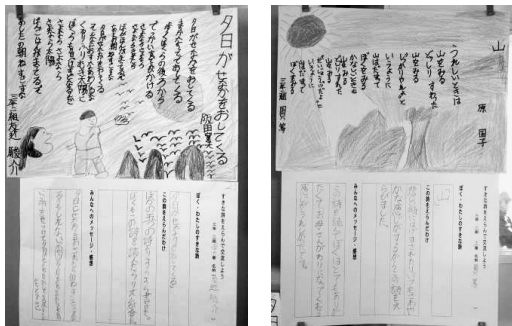
①単元について

詩には作者が思い描いた情景や思いが表現されている。読み手はその表現された言葉から情景を思いうかべ、そこに込められたイメージをつかみ、自分の内面にも思いを描いていく。

今回の学習に先だって、「詩を読もう」の単元で6編の詩を扱っている。その中で、自分が気に入った詩を選び、自分が気に入った理由や、自分が感じ取ったよさを交流する活動を行い、自分が選んだ詩のよさを紹介するカードを作成している。

- ・「山」原 国子
- ・「星とたんぼぼ」金子 みすゞ
- ・「のはらうたⅠ」工藤 直子
 - 「ゆめみるいなご」いなごわたる
- ・「きゅうしょく」谷川 俊太郎
- ・「世界中の海が」マザーグースの歌
 - 水谷 まさる 訳
- ・「夕日がせなかをおしてくる」阪田 寛夫

「詩を読もう」で学習した6編の詩



子どもたちが作成した詩の紹介カード

子どもたちは、表現上の工夫の学習も交えながら、詩の特徴をつかみ、詩の言葉の響きやリズムのおもしろさを感じ取っていた。

そこで、本単元では、詩の持つおもしろさを読み取り、さらに、自分の感じ取ったイメージを、相手を意識し、効果的に伝えるための手段を考えながら伝え合う活動を行った。また、その活動の中で、自分の思いを明確に持ち、言葉とその他の手段を用いて他者と思いを伝え合い、共有していくことをねらいとした。

②目標

- 様々な詩に興味を持ち、進んで自分の感じ取った思いを表現することができるようにする。
- 伝えたい内容を分かりやすく話したり、相手の話の要点をつかみながら聞いたりすることができるようにする。
- 聞き手を意識しながら、発表する内容をまとめたり、ポスター等を書いたりすることができるようにする。
- 詩のおもしろさや楽しさを読み取り、伝えたいことをとらえることができるようにする。
- グループで、協力して学習を進めたり、詩の内容への理解を深め、お互いの考えを認め合ったりすることができるようにする。

③学習計画（全10時間）

- 第1次 いろいろな詩を読もう・・・2時間
- 第2次 詩のみりよくを表現しよう・・・8時間
 - ・詩のおもしろさを見つけよう
 - ・表現の方ほうを考えよう
- 第3次 発表会をしよう・・・2時間

(2) 授業の実際

〈第1次 いろいろな詩を読もう〉

本単元の学習を行うにあたって、最初に阪田寛夫さんの作詞による「ともだち賛歌」を紹介した。歌そのものを知っている子どもも多く、歌を口ずさむ子どもが出てくるとたちまち合唱になった。また、この歌詞の作者が阪田寛夫さんであることを紹介すると、「夕日がせなかをおしてくる」の詩も歌になっていることを紹介してくれる子どももあり、子どもたちは意欲的な反応を示した。

詩は形を変えながらいろいろな場面で表現の一部としても用いられていることを紹介しながら、自分の気に入った詩を、そのおもしろさや魅力を伝えるのにふさわしい方法を選びながら表現し、紹介し合おうという学習の計画を話し合った。

事前に授業者もいくらか詩の本を用意しておき、子どもたちが家から持ってきた本と合わせて、自分が魅力を感じる詩を自由に選んでいけるようにした。また、詩を選ぶ活動と並行して、伝えるための方法についても話し合った。導入で紹介したような方法の他、楽器で音をつけながら朗読することや、動作をつけて発表

する、ポスターを作成する、絵本や紙しばいにして紹介するなどの方法が出された。

〈第2次 詩のみりょくを表現しよう〉

自分が魅力を感じる詩を選んだ後、学級の生活班の中で、自分が選んだ詩とその詩の持つ魅力について話し合いを行った。交流を行ってから、実際にその魅力を伝えるのにふさわしい表現方法について考えながら、班の中で発表する詩を一つ選ぶようにさせた。



発表したい詩を決めている様子

選んだ詩の魅力が伝わりやすいかどうかを考えながら、発表する表現方法や発表の流れを話し合った。

子どもたちが選んだ詩と表現方法は次の通りである。

- ・「ほく」 谷川 俊太郎・・・(音・歌)
- ・「たらこ」 谷川 俊太郎・・・(音・歌)
- ・「春のうた」 草野心平・・・(ポスター)
- ・「雨ニモマケズ」 宮沢 賢治・・・(ポスター)
- ・「おならうた」 谷川 俊太郎・・・(動作)
- ・「学校」 和田 誠・・・(動作)
- ・「ほくがここに」 まど・みちお・・・(紙芝居)
- ・「木」 金子 みすゞ・・・(紙芝居)
- ・「のはらうたⅠ」 工藤 直子
- 「はるがきた」 うさぎ ふたご・・・(紙芝居)
- ・「太陽と地球」 まど・みちお・・・(紙芝居)

- ・「ほく」・・・リズムがいい詩なので、音を入れることにしました。トライアングルとカスタネットを使いたいです。
- ・「たらこ」・・・知っている歌に合わせてみるとぴったりでした。
- ・「雨ニモマケズ」・・・詩に出てくる場面をポスターにかいてみたいです。
- ・「木」・・・詩の内容に合わせて、木がかわっていく様子を紙しばいで表すことにしました。

子どもたちは自分なりの理由を考えながら表現方法を考えていった。一通り準備が整ったところで、同じような表現方法を選んでいるグループをペアにして、

お互いが考えた発表を見合う活動を取り入れた。



ペアグループで発表を見合う活動の様子

ペアグループによる交流を行い、実際に発表の流れや、効果的な表現方法になっているかなどお互いにアドバイスや感想を出し合い、そのアドバイスを元に発表を修正し、実際に発表する活動につなげていった。

〈第3次 発表会をしよう〉

グループごとに自分が感じ取った魅力を伝える表現方法を考えながら学級で発表会を行った。多彩な方法で自分が感じ取った詩の魅力やおもしろさを工夫して表現し、楽しく発表会を行うことができた。

また、本校の行事である「表現のつどい」でも、この学習で学んだことを生かしながら3年生の発表を行い、他の学年にも自分たちが考えた表現を伝えていくことができた。

(3) 学習を振り返って

今回の学習では、事前の学習で詩の読み取りを行っていたため、詩の読み取りに関してはスムーズに学習を進めていくことができた。しかしながら、発表することを意識したあまり、詩の内容を共有し、発表者以外の子どもたちがその詩の解釈を十分深めていくことができていない面があった。限られた時間での学習ではあるが、教室環境を有効に使うなどして、発表される詩のイメージを自分なりに持っておいてから発表を参観するの必要を感じた。

詩との出会いを経て感化された自己の内面を様々な表現を駆使しながら発信し、他の学習者とつながっていく過程をさらに精選し、必要な活動を加えながら単元を構成していく必要があるだろう。

4. 実践2-7年「インタビューをしよう」

(1) 授業の構想

① 題材について

本題材は、人と人との心の通い合いをねらいとした単元「出会いと発見」における「話す・聞く」の教材である。

インタビュー活動は、ただ単に「質問する」「聞く」活動ではなく、相手から「言葉」を「引き出す」ためのコミュニケーション活動であり、インタビュアーは受け身的に「聞く」のではなく相手とのコミュニケーション活動を主体的に進めていくことが重要になる。

子どもたちの日常を見ると、自分の考えを持ったりそれを表現したりすることはできるが、他者の意見や考えから自分を見つめ直すという力が十分に育っていないという状況がある。

ここでは、インタビュー活動は「対話・言葉のやりとり」であるという視点から、言葉による心の通い合いを体験させる。そして、他者との出会いとそこで交わされる一語一語を大切にすることによって、自分のコミュニケーションについて考えを深め、実践する能力を身につけさせることをねらいとした。

指導にあたっては、インタビューが「対話」であるということが理解できるように、インタビューのねらいを考えさせることによって、質問の内容を吟味させ、言葉のやりとりができるようにする。また、実際に少人数のグループによるインタビュー活動を仕組み、それぞれの生徒に役割に沿った体験をさせる。さらに、他の生徒の様子やそれに対する感想・発見を交流し合うことで、インタビューにおけるよい質問や態度について体験的に考えさせ身につけさせたいと考えた。

②目標

- インタビューが「対話・言葉のやりとり」であることを理解し、工夫して的確な方法を考えることができるようにする。
- 質問の内容や順番などの聞き方の工夫をして、相手の気持ちを考えながらインタビューのねらいに沿って聞き出すことができるようにする。
- それぞれの立場から、自分たちが行ったインタビューについて振り返り話し合うことができるようにする。
- 他者に伝えることを意識して、自分たちの話し合ったことを適切にまとめ、効果的な発信について考え、実践することができるようにする。

③ 学習計画（全8時間）

- 第1次 インタビューについて学ぼう・・・2時間
- 第2次 インタビュー活動の準備をしよう・・・2時間
- 第3次 グループごとにインタビューをしよう1時間
- 第4次 振り返りを交流し、発信をしよう・・・2時間
- 第5次 報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

(2) 授業の実際

〈第1次 インタビューについて学ぼう〉

導入では、まず初めに生徒自身がインタビューにつ

いてどのようなイメージを持っているかについて考えさせた。すると、スポーツ終了後や音楽祭等受賞の際のインタビュー場面等の意見が多く見られ、「感想を聞くこと」がインタビューだという認識が感じ取れた。そこで、アンケート調査との違いを考えさせ、「はい・いいえ」で終わるものではないことを確認し、さらに、教科書本文をもとに二人一組となり、「話を聞く目的」「話を広げる視点」を意識して本文の続きを行うロールプレイを行わせた。

これらの活動を通して、一方的な質問と回答ではなく、その場の状況に応じた言葉のやり取りであるということに気付かせるようにした。生徒たちには目的を持って話を広げる質問の仕方に苦慮する様子も見られた。活動からインタビューに必要なことや気付きをノートにメモさせ、授業者が助言・評価を行った。感想には、一つの内容について話を深めることの難しさを感じ、日常的な会話（おしゃべり）との違いにふれた記述や、相手の答えを聞き手がよく理解することの大切さについてふれた記述が多く見られた。

〈第2次 インタビュー活動の準備をしよう〉

前次で、相手の反応を生かしながら話を広げる質問の難しさに気付いたことを導入として、実際のインタビュー活動の準備へとつなげていった。4人グループ（男子2名・女子2名）を9班、5人グループ（男子2名・女子3名）を1班の計10班で、それぞれ「聞き手・話し手・記録者①（発言記録）・記録者②（態度・様子等記録）」の役割を全員が体験することとした。時間を1ペア3分として、実際にインタビューをする相手以外とペアを組み、質問内容や言葉についてシミュレーションをし、本番の準備を行った。また、話し手の意識を高めるために、事前に「今、話したいこと」の項目を掲げ、聞き手はその中から中心内容を設定することで活発な活動になるよう配慮を行った。授業者は、各グループの様子を見ながら、生徒たちが考えている質問に答えたり、逆に質問を返したりといった支援を行い、具体的な活動になるようにした。実際に一人一人が全ての役割を体験することで、積極的に活動を行っている様子が見てとれた。この段階で、ノートに中心質問とそこから予想される答えに対してどのように対応していくかについてまとめさせた。ここでは、次時のインタビュー活動で生徒自身に質問のあり方に気付かせることをねらいとして、細かい指導・助言を行うことはしなかった。

〈第3次 グループごとに、インタビューをしよう〉

実際のインタビュー活動を行う上で、振り返りの視点をそれぞれの役割ごとに示すことで主体的な活動になるよう、生徒の体験を重視した。

実際の活動場面では、指定時間以上に話が続くペアや3分に満たず終了するペアも見られた。活動終了後、グループ内で、それぞれの振り返りの交流を行った。このときの話し合いは、一人一人が他の発言に対して複数の発言を重ねるような話し合いになるよう指示をした。

そして、2つの班から気付きを発表させ、それについて良い点・不適切な点を全体で共有させた。具体的な発表内容は、話し手が発言したことを聞き手が整理し、その内容を明らかにすることで発展させる質問や、聞き手が自分の考えや感じたことを話すことで話し手に具体的な視点を与える質問が良い質問であり、聞きたいことだけを矢継ぎ早に口にする質問は不適切だとする発表であった。



インタビュー活動の様子

〈第4次 振り返りを交流し、発信準備をしよう〉

前時に行ったグループでの振り返りやインタビューの記録をもとに、効果的なインタビューのあり方について、それぞれの考えや気づきの交流を行った。具体的な質問の仕方や確認の仕方について、それぞれの視点で感じたことや考えたことを話し合うことで新しい発見や気づきが見られた。

次に、意見や考えをグループでまとめ、それらを一枚のパネルとして作成し、クラス全体へと発信することとした。この活動は、これまでの学習で自分たちがインタビューについて体験的に学んできた技能を、他者にどのように伝えれば効果的に伝わるのかという視点で考えさせることをねらいとした。パネルのみやすさという視覚的な効果や、具体的にイメージさせるための発表の仕方など、言葉のあり方について話し合いを行っていった。

この時間の評価は、インタビューの仕方についての具体的な方法を整理したものと発信に向けた準備の様子の観察で行った。



生徒作成のパネル

〈第5次 報告会〉

各グループ発表3分、質疑応答1分で行い、最後に全体を通してのインタビューのあり方についてまとめ、自分の考えを確認する形で本題材を終えた。

(3) 学習を振り返って

これまでの学習の様子や振り返りを見ると、インタビュー活動の実践を行い、自分やグループメンバーの実際の言葉に触れることを通して、インタビューにおける効果的な言葉や態度について考え、実践することができていた。さらにグループで作上げた表現を全体へと伝える活動を仕組みことで「話すこと・聞くこと」について他者とかかわりながら学習することの楽しさを実感していた記述も多く見てとれた。

今後も各領域において、協力しながら学び合う活動の工夫を行うことで、新しい言葉の創造につながるように支援を続けていきたい。

5. 考察

(1) 教材としての多様な他者の設定

学年の発達段階や学習のねらいに合わせて、教科書だけではないさまざまな他者の言葉を教材としたり、自分の言葉を見つめ直させたりする授業や単元を開発することができた。

3年生は、詩の作者という目の前に存在しない他者の言葉やその言葉にこめられた思いを、新たな表現として発信するための源として位置づけた。グループでの話し合いでは、お互いの考えを出し合ったりアドバイスし合ったりすることによって、自分たちの表現を練り上げていった。その結果、子どもたちは、自分たちの考えた表現を他者と交流することによって、楽しみながら、詩の新たな魅力に気付いたり、新たな表現方法を発見したりすることにつながった。

7年生では、自分自身が聞き手や話し手になるインタビューを直接体験することを踏まえて、友達のインタビューの様子を観察した。そのことによって、自分

たちがふだん何気なく使っている言葉を客観的に見つめ直し、相手の思いをいかようにも引き出すことのできる言葉の力に改めて気付くことができた。これは、私たちがめざしている「言葉をとおしてかわり合い、他者とつながる言葉をつくり出す」ための第一歩と言えるだろう。

いずれの場合においてもそれぞれが出会った他者の受けとめには個人差があり、十分な解釈を踏まえての交流になったとは言い難い。しかしながら、多様な他者に出会わせることで子どもたちはより多角的・客観的に言葉をとらえ、興味を持って教材に向き合うことができたと考える。

(2) 発信型の授業構成

学習したことを自分なりの表現として発信する場を設定することによって、学習者どうしの言葉による新たな関係を築いたり、教室外の新たな他者との出会いを次の学習に生かしたりできる。発信には必ずそれを受けとめる相手が必要であり、他者を意識せざるを得ない。また、発信することで返ってくる他者の反応から学ぶこともできる。

3年生の実践では、各自が選んだ詩の良さをいかに他者に伝えるかという部分で、同じ表現方法で伝えたい者どうしというグループ化を図り、協同的な学びの一端とした。グループ内ではさまざまな工夫を凝らし一生懸命に表現しようとしていたが、発信する側と受けとめる側の意識差が生まれてしまった。発信する側は伝えたい詩のイメージを大きく膨らませていたのだが、十分な整理ができていなかったために受けとめる側とのズレが生じたのである。

7年生の実践は、インタビューという他者を直接意識せざるをえない教材であり、インタビュー活動そのものが協同的な学びを生み出す教材であった。観察者としての学びを加え、意見交流することでよりよいインタビュー活動のあり方を追求していくことができた。しかし、この学びは、あくまでも「インタビュー」の中での出来事であり、その枠を越えたものには至っていない。

どちらの実践においてもいろいろな形での発信を意識した授業を展開し、ただ単に自分の思いを伝えるのではなく、グループごとの意見の練り合いを踏まえた上でのクラス全体への発信につなげていった。一方、発信するという活動自体に満足して、表現内容や方法を十分に吟味することができなかった面もある。学習者に見通しを持たせることや受け手の側の意識を高めることによって、学習を深めさせることが必要である。

このように、学習場面に様々な他者を設定することによって、言葉をとおしてかわり合い、自分の考えの広がりや深まりを確かめたり、その意義を大切に

たりすることができるようになってきた。他者の存在によって学習者は、より豊かな言葉を得ることができると。今後は、実生活においても他者とつながる言葉をつくり出す学びへと発展させていきたい。

6. おわりに

他者とかわり、つながる言葉をどのように生み出していけばよいのかということは、国語科における根本的な課題であり続けてきた。本研究においては、3年生と7年生での実践を中心に考察を展開した。いずれの学年の実践も、国語科における「話すこと・聞くこと」の領域にかかわる取り組みであった。

3年生の各自が選んだ詩の良さを友達に伝えるという実践は、情報を伝える工夫を協同で行うものであり、7年生の実践はインタビューで相手から必要な情報を「聞き出す」ためにはどのような工夫をすればよいのかということに、協同で考えながら取り組むものであった。いずれの実践も、言葉を媒介とした他者との交渉過程に取り組むものであり、その過程で学習者のうちに多くの発見が生み出された。

他者とかわり、つながる言葉はどこに生まれるのであろうか。実践を通して明らかになったのは、そうした言葉が学習に参加する者のあいだの交渉過程で生み出されるということである。そういう意味で、状況に依存し、相互関係のなかで育まれる言葉であると言えることができるのかもしれない。

詩の良さを伝えるという取り組みのなかでは、伝えようとする者のうちに聞き手像や聞き手意識をどのように築くのかということが課題であったし、インタビュー活動への取り組みにおいては、インタビューをする者（聞き手）が、聞かれる側の立場をどれほど豊かに想像することが重要なことであった。いわば「話し手のなかの聞き手意識」「聞き手のなかの話し手意識」を成り立たせていく条件をさらに探っていく必要がある。それは、言葉によるコミュニケーションを成り立たせていく条件の探究でもある。

このたびの研究で取り組み、考察した二つの実践は、言葉によるコミュニケーションを扱いながら、協同的な学びを営むものであった。それは、他者との交渉過程のなかでこそ学ぶことのできることを多分に含んでいたと思われる。このような要素を含んだ学習は国語科での総合単元を構成していく上での基盤となるだろう。学習者の発達の水準を意識しながら、他者との交渉過程を日々の授業のなかにもどのように位置づけていけばよいのか。さらに探っていかなければならない。